

Title	高麗浄瓶の様式変遷とその特徴
Author(s)	権, 相仁
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52722">https://doi.org/10.18910/52722</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 高麗浄瓶の様式変遷とその特徴

権 相 仁

慶星大学校（釜山）

キーワード

浄瓶 / 浄水瓶, 触瓶, 水瓶, 甘露瓶

Kundika (*Jōhei*), Kundika (*Shokuhei*), Water vase,

Amṛta vase

1996. 8. 29. 受理

はじめに

1. 浄瓶の起源とその用途
2. 高麗浄瓶と仏教との関わり
3. 高麗青磁の変遷と浄瓶
4. 高麗浄瓶の様式変遷とその特徴 (A) I 形式 (B) II 形式  
まとめ

## はじめに

仏教が興隆した高麗時代には、非常に優れた仏教工芸品が多種多様に作られている。特に金属器と陶磁器の中で、容器の機能を持ついろいろな形の瓶が現われた。これら瓶形は高麗の代表的な器形の一つであり、ほかの器形に比べ、その形態が数多く多様に作られている。これらは、その形態と用途の違いによって浄瓶・長頸瓶・爪形瓶・鶴首瓶・梅瓶・瓢形瓶・双耳瓶・一般瓶などに分類できる。その中でも高麗浄瓶と呼ばれる水瓶は、構造的に複雑である。その用途に合う機能を持ち、造形的にも美しく、文様の優雅さと技法の精巧さが調和した高麗浄瓶は、格調の高いものであると認められる。しかし、高麗浄瓶は環境と風俗による観念の差によって、その名称、用途などが本来の意味とは違って活用されてきた。その大きな理由として、次のことが挙げられる。

- (1) 高麗浄瓶に関する研究のほとんどが日本の学者の手によってなされ、かれらの観念に基づいて研究され、高麗浄瓶の本来の概念とは異なった解釈がされてきた。
- (2) 当時の「律蔵」の解釈の誤謬。
- (3) 時代の変遷による思考の変化。
- (4) 各国の生活環境と風俗、気候条件などによる浄瓶の用途変化など。

従って、私は高麗の成熟した仏教文化の基盤の上で完成された高麗浄瓶を、仏教工芸品と仏

教の『律蔵』<sup>1)</sup>、出土遺物を中心に考えて比較、検討することによって次に提起する問題を通して、高麗浄瓶に関する誤った認識を解明していきたいと思う。また、浄瓶の信仰的背景として浄瓶の語義と用途および仏像との関係を調べ、浄瓶の発生に対する起源を考察し、浄瓶の種類と名称を分析した。

そして高麗浄瓶の様式変遷とその特徴を探究するため、現存高麗浄瓶を中心に形態別構造特徴、表面意匠などを考察すると同時に中国、日本の浄瓶を例として挙げて比較、分析した。特に以上に関する文献として仏教の『律蔵』、『南海寄帰内法伝』<sup>2)</sup>、『宣和奉使高麗圖經』、『天工開物』などを通じてその考証の資料とした。

## 1. 浄瓶の起源とその用途

浄瓶とは本来、印度では水瓶の用途による別称として、梵語では「細長頸」、すなわち細長い頸部がついている水を容れる瓶を意味する。つまり水瓶とは「水を容れ、飲み水や手足、口などの清浄に供するために用いる器」<sup>3)</sup>をいう。従って浄瓶は飲用器として使わず水瓶の用途で使うことから浄瓶と水瓶が混同使用されたことが解かる。しかし、紀元後、宗教儀式が行われるようになって、仏陀の精神世界に没入した思想が台頭するようになり、浄瓶の用途も変化して僧侶の生活必需品、及び仏教用具として仏前に浄水を供える供養具、あるいは菩薩などの持物で<sup>4)</sup>あり、宗教儀式用としてその用途の幅も拡大されていったのである。

ところで、水瓶は古くから仏教用具に取り入れられ、僧侶の生活必需品（比匠十八物）の一つに数えられる。これは「仏教においては、常に心身を清浄に保つことを旨としたことに由来する」また、「水瓶の祖形は西方に端を発して西域を経由して中国へ伝来したものと思われる」中国では、北魏時代以降の遺品が知られ、水瓶を意味するサンスクリット語「Kamandalu」あるいは「Kundika」を瓶・藻瓶・藻罐あるいは音読して軍持<sup>5)</sup>と称し、仏事を中心に用いられた。また、唐の高僧・義浄が著した『南海器帰内法伝』には、水瓶に関する一章が設けられ、それによると水瓶には二種があり、一つは陶磁製で浄水を入れる浄瓶、他は銅鉄製で手洗い水などを容れる触瓶と記されている。つまり、これらの浄瓶はその用途によって浄水瓶・触瓶（藻瓶）・甘露瓶などに区分して使用していた。

(A) 浄水瓶は飲料水や口などの洗浄用水として使用する水を蓄える容器を指し、浄瓶、浄澡罐、梵語では「Kundika」、すなわち、君持（＝軍持）、軍持浄瓶とも称した。

(B) 触瓶は手洗い水などを容れる水瓶として厠澡罐、澡罐、銅澡罐、銅水瓶と称した。

(C) 甘露瓶は元来、印度の暑い気候に耐えるために必要な代用薬としての油、塩蜜などを入れる薬用瓶であったが、紀元後、仏像が信仰の対象として一般化し、宗教儀式用の甘露瓶として甘露水、甘露酒、甘露茶を入れる容器に転用された。仏教の經典である『律蔵』によると、こ

これらの形状はほとんど判別が不可能なので、単に材料によってその用途を区分して使われていた。つまり、浄瓶と甘露瓶は陶磁製で、触瓶は金属製で作る事によって浄・触を区別し、或るいは瓶の胴部に注口があるものと注口の代わりに穴をあけた形象で用途の分類をしたと思われる。このような機能性は、インドの暑い気候に起因する衛生上の面を多分に考慮した結果ではないかと解釈することができるのである。

また、水瓶の中には常用水瓶、常用触瓶などの共同用と個人用の水瓶があったので、浄瓶が生活用器であることが裏付けられる。そして浄瓶が僧侶の生活必需品であったことを明らかにするのは『律蔵』に「僧侶たちがいつも身につける随物の中には君持・澡罐・油支瓶などがあり」また「僧侶の生活必需品として六物があるが、これは三衣・坐具・水羅・君持であり、また君持には二つがあり、これは浄・触を称する」と書かれてある。

このように印度の風習と生活環境に適合して使用された水瓶が、中国、韓国、日本に伝承されてきて本来の概念とは異なる各国の実態に伴ってその感覚もまた変化し、浄瓶が宗教儀式用の甘露瓶に認識されるようになっていった。

故に中国と日本では浄瓶はただ単に儀式用の甘露瓶として頻用され、高麗では浄瓶が印度と同じく仏前に浄水を供える供養具として、また観音像、菩薩像などの持物として甘露瓶、不浄用の厠澡罐として使用された。しかし、高麗では用途において材料の区分がなく、造形性と表面意匠が優れたものと、それらが粗雑なものを区別して、浄・触に分別利用したと思われる。しかし、この三国に共通する傾向としては、それらが陶製のものよりも多少生産単価が高くつくとしても、表面装飾の加工が多種多様に施すことができる銀製、銅製、鉄製ものを、浄瓶用にと憧れたものと推測できるのである。以上の如く、三国の気候、環境、時代状況、出土遺物を中心に考察してみると、この推測は立証が可能である。しかしながら、今まで高麗浄瓶に関しては、日本と同じく甘露瓶として認識され、浄瓶に関する研究の上で数多い誤謬があった。

今日、このように浄瓶の用途と名称が混同して使われるようになったのは、その当時、僧侶たちの印度旅行記と『律蔵』の解釈の誤謬、時代の変遷による思考の変化などが挙げられる。この主たる理由は、風習と生活環境が異なる国の文化様相を記録することによって彼等の見解や認識の差が生じたのである。

高麗時代には水瓶の作例が著しく増加するが、その中でも下記の形式が主流となって高麗浄瓶の特徴を表現している。本形式の高麗の作品は、金属器と青磁と同一の遺例が多くその胴部には独特なモチーフの蒲柳水禽文が現われて、この瓶などが浄瓶とよばれる由来はこの文様とも関係がある。

## 2. 高麗浄瓶と仏教との関わり

高麗は、10世紀の初め(918)から14世紀の終わり(1392)まで475年の長い間続いた王朝であり、この時期はちょうど中国の五代・北宋・南宋・元・明初に相当する。

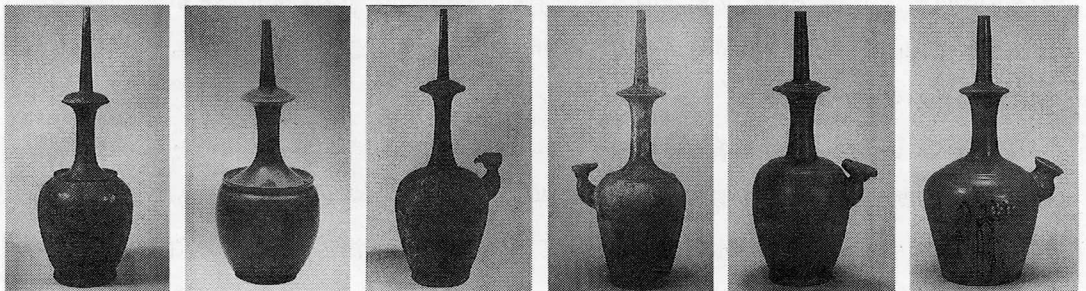
高麗は建国とともに中国式の文官優先の行政体制を推進したため、上流階級の教養水準を大いに高めることになった。更に仏教が栄え、人心が安定し、経済的にも豊かなよい時代だったと伝えられる。従って、高麗美術は中国の新しい様式や技法が移入され、多様性を帯びて発達し、仏教を国教とした政策に伴って、繊細な感覚と洗練された造形技法とが結合し展開した。

このような時代的背景によって高麗時代は仏教関係の金属製と陶製で出来た仏具や生活用具が多量に生産されており、それらは驚くほど優美で精緻なものであった。特に浄瓶は供養のためには、不可欠な仏具として、あるいは僧侶の生活必需品として使用されたと考えられる。また、これら浄瓶は金属とか青磁で作られたものが数多く、その様式においても独創的な高麗人の気質をよく反映している。

ところで、高麗の浄瓶には金属製の浄瓶を写したものが多い。特に、朝鮮では古代から金属工芸が発達していて、形態の美しさや文様の精密さを等しく感じさせるものが多い。金属工芸技術の発達は高麗時代に受け継がれて、仏教の隆盛を背景に仏教関係の金属仏具や仏器、また生活用具が多量に作り出されていて、それらは驚くほど優れたものである。この仏具ともいわれ、仏教修業に必要な用具であり、宗派によって種類や形も異なっている。特に11世紀前半には青磁は大量生産ができず、上流階級の高級品需要の指向に応じた程度で、一般には銅製の食器類が普通であった。また、朝鮮では古来から夏には陶磁製食器を、冬には金属器を使用してきた。現在でもこのような習慣が残っている家が多い。

そして、仏器の中で青磁だった主なものには香炉、香盒、花瓶、水瓶類、鉢類、托蓋、人物像などがあり、これらの多くは金属器の意匠と共通している。また仏器といわれるもののなか

### 〈高麗浄瓶の典型的な形式 I. II. 例〉



①

① I 形式：No.3 銅製浄瓶

②

② I 形式：No.1 陶製浄瓶

③

③ II 形式：A-No.6 銅製浄瓶

④

④ II 形式：B-No.5 銅製浄瓶

⑤

⑤ II 形式：A-No.5 陶製浄瓶

⑥

⑥ II 形式：B-No.20 陶製浄瓶

には日常の飲食器と同様の器があるが、仏器と日常食器の区分方法としては、蓮弁を連ねた蓮花文様状の有無や、文様、形状に蓮花の意匠が用いられているか否かによって分類されていたのである。また仏用に使った鉢には、鉢の内、外面に蓮弁の文様が施されているものもある。そして、僧や仏門に帰依した人の遺骨を納める骨台や舍利台などもある。以上の点から考えてみると、高麗時代には仏教文化と高麗青磁が深い関連性をもっていたということが理解できる。

高麗時代には青銅器や陶磁器の中にいろいろな形の瓶が数多く作られている。そして韓国では習慣的に底径より口径が細いものを瓶と称して、またそれら瓶の構造的特徴によって、それぞれ名称を区分して呼んでいる。しかし、この瓶形は韓国先史時代遺物の中にはほとんど見られないが、三国時代土器の中には口が細く、胴部が丸い瓶形が現れる。このような土器瓶の根源は分らないが、中国ではすでに六朝の頃から金属製と陶製の瓶形が現れるようになり六世紀頃にはこの形態が次第に定着していく傾向を示した。韓国でも中国の影響を受けて「三国時代と統一新羅時代には観音菩薩立像などの持物として多く見られる」<sup>7)</sup>しかし、この形状は底径より口径が細いものがほとんどであり、この小論に称する浄瓶の形姿は極めて少数である。

高麗において浄瓶が仏具また生活用具として使用されてきたことを裏付けるのは宣和五年(1123年)宋の使節団として高麗に來た「徐競」という人物が著した見聞録『宣和奉使高麗圖經』卷第三十一、器皿二の浄瓶の頃である。それによると「浄瓶之状。長頸修復。旁有一流。中為兩節。仍有轆轤。蓋頸中間有隔。隔之上復有小頸。象替筆形」。「貴人国官觀寺民舍皆用之。惟可貯水。高一尺二寸。腹径三寸。量容三升」と浄瓶について記述されている。ここに記された浄瓶の形象はこの小論に称する形姿と一致する。また、後段で「貴人・国官・觀寺・民舍皆これを用う」とあり、当時において浄瓶が仏具として用いられるだけでなく、一般においても貯水器として生活用具の一つとして使用されていたことが伺える。さらに、浄瓶は金属器、青磁、白磁、土器および民家で使った陶器「Jilkeuret (チルグルッ)」などに数多く見られ、当時、ひろく流行していたことが窺える。

また、浄瓶の形象は高麗時代仏画の中にある観音図にもよく見られる。これらの仏画を見ると楊柳観音像のそばに浄瓶が置かれてあり、浄瓶の注口部には柳が差されてある。あるいは浄瓶と承盤が対になっている組み合わせものも特徴であると言える。このような様式は盛唐中国仏画<sup>8)</sup>の中にも見られる。また、印度では二～三世紀頃の作品と推定できるガンダーラ様式の弥勒菩薩像の左手にも浄瓶の形象を見ることができる。これらの浄瓶は特に宝瓶、甘露瓶の用途を表わすものだと考えられる。

つまり、この小論に称する浄瓶の形姿は底径より口径が細い瓶の胴体上半部、つまり肩部分に煙管の先のような注入口が付き細長い管状の頸、その上に高く上方にのびた尖台の形姿の口がついてあり、この口から水を注ぎ出すようになっている。また、この上方口部の形は主に六

角柱および八角柱状になっており、注入口には蓋がついている。その蓋には安全を保つためにつまみがついている。以上は高麗浄瓶の典型的な形式と言える。そして、これらの浄瓶は水瓶と呼ばれて韓国では三国時代から作られているが、この時期から統一新羅時代に至る遺例は少なく、高麗時代以降、一定の形式をもって定着していく。

高麗青磁浄瓶形はその原形が青銅浄瓶群であり、その作例としては三国時代と統一新羅時代のものである青銅製菩薩立像の手に持っている瓶を〈作品例1〉と〈作品例2〉とに挙げられる。(2-1)は現存する金属製瓶の中で一番古いものであり、景德王17年(758)に該当する。

(2-2)は(2-1)よりすぐれた形態であり、胴部には銀象嵌の雲文が長い一本の線としてつながれているのが特徴である。この作例は(2-1)とほぼ同じ時期のものとして推測される。(2-3)の胴部と頸部は上記の作例と似ているが、頸部の上方に高く延びた6刻尖台がつく唯一の金属製浄瓶である。

これと同じものとして11世紀頃のものと思われる日本の布薩形水瓶が挙げられる。そのほか、三国時代の土器にも口径が細く、胴体が脹らんでいる瓶が現れる。しかし、このような土器瓶の原形はわからない。上記の作風は中国の唐時代のもとの奈良時代の作例が数多く、韓国にはその作例が少ない。ただ、高麗では唐時代に普及した水瓶形式を受けいれて、高麗浄瓶の特徴を表現し、金属器形と陶磁器形が並行してその盛期を迎える。しかし、この浄瓶の起源は明確ではない。そして、器形から見ると肩部の口から水を入れ、頂部から注出するという機能的には不合理な器であり、そこに宗教的制約の介在を推測することができよう。

### 3. 高麗青磁の変遷と浄瓶

高麗美術は中国の新しい様式や技法が移入され、多様性を帯びて発達し、仏教を国教とした政策に伴って、繊細な感覚と洗練された造形技法とが結合し展開した。

このような歴史的背景をもって製作された陶磁のうち、もっとも優れたものとして高麗青磁が生み出され、特に高麗青磁に対する宋の青磁の影響は大きかった。高麗と宋とは北方から契丹・女眞・蒙古などの遊牧民族の圧力と侵略を間断なく受けて、時には両国の断絶が不可避になった。緊迫した事態の中でも高麗と宋との文化的交流や経済的交流はたえず続いた。その交流の継続によって中国の青磁が高麗に伝わり、それが高麗青磁の発展に非常に大きな影響を及ぼしたのである。この点については高麗の陶工が中国に行って学んだとか、中国の陶工がやって来て、その技術を伝えたと見る見解もある。

このように中国陶磁を受容しながら発展した高麗青磁が変遷して行く過程を、時期と技法、文様などによってたどり、更にその時期の浄瓶について述べてみたい。

朝鮮の陶芸は9世紀末期に形・質ともに古墳文化的性格から脱皮して、磁器質窯業の段階に

移行するようになる。すなわち、形から言うと儀礼的要素、非機能的な要素を含んだ古代様式から用途・機能が細分された現実的な器に変わり始めたと言える。西暦985年ごろから先駆的青磁が始まり、998年ごろには本格的な青磁に移行する。つまり、高麗時代において10世紀前半から11世紀前半に至るまで、中国越州窯の影響が高麗陶磁の器形と釉色、技法などに深く現われるようになる。要するにこの時期の器形は、晩唐・五代様式の余韻を感じさせる高麗陶磁窯器成熟の初期段階であると言える。11世紀後半になると、五代末、北宋初期における越州窯の鉄絵青磁の類型が多く見られる。つまり11世紀末に象嵌技法が現れる以前の時期を意味する。この時期には陰刻文、陽刻文の技法、また中国北宋時代の陶磁文様と金属工芸文様が意識的に使われている。主に使われた文様の素材には鸚鵡文、鳳凰文、蟠龍文、波魚文、雲龍文、唐草文、宝相華唐草文、蓮文、蓮弁文、雷文などがある。この時期の青磁浄瓶は各部分の比率と調和がとれず、浄瓶の頂部、つまり尖台は短かくて厚く作られている。また尖台は大部分は面取りになっているがその角度は不統一である。文様は無文と陰刻文による蓮唐草文、牡丹唐草文などの植物文、また金属浄瓶の模倣品が主に使われた。

12世紀前半、すなわち仁宗年間に高麗貴族政治は黄金期を迎え、高麗陶磁には高麗貴族たちの理知的な雰囲気及び禅宗の強い影響が背景と考えられる。高麗陶磁は北宋との交流と刺激の中で飛躍的に発展し、12世紀前半頃には中国とは違う独自の特色を見せるようになる。つまり、この12世紀前半の50年間は高麗陶磁史ばかりでなく、朝鮮陶磁史上の黄金時代であり、金属工芸、絵画、印刷術など、文物の発展とともに、高麗陶磁はその造形感覚と技術面において顕著な国風化の傾向を示すようになる。

この時期には多彩な器形の青磁が作られており、高麗青磁器物のすべてが高麗的な洗練された機能性や造形に現れて、濃厚な高麗の特色が定着する時期であり、青磁浄瓶の洗練度も同じく12世紀前半がその絶頂期として、優雅端正な美しい意匠と精緻な手法の作品が数多く作られている。また、この時期の高麗青磁の文様意匠は高麗初期の北宋陶磁文様と金属工芸文様から少し脱皮して高麗的に翻案されている文様、また高麗独自の文様が現われる。特に浄瓶の文様意匠は高麗独自の蒲柳葦蘆文、野菊文などで実在動植物が主題になっており、文様というより事実に表現された点景的な要素が大きかった。特に金属器銀象嵌にみられる点景描写と酷似するものとか北宋系文様の雷文、蓮弁文、唐草文、菊唐草文、蓮唐草文、牡丹文は初期より簡略化される傾向をみせる。これら文様意匠は中国や日本とは極めて異なり、韓国の自然と人文からくる情緒を強く反映している。

そして、高麗青磁浄瓶に主に使った技法は陰刻文、陽刻文、象嵌文などで、特に象嵌文は金属器銀象嵌文様が青磁文様へと移行したものと推定できる。このような表面意匠とともに浄瓶の作風は初期より全体的に均衡が整った器形が高麗風に洗練されている。また、高麗の陶工た



ちが独自に生み出した形態も見られる。

また、12世紀中頃から1231年ごろまでは青磁象嵌の全盛時代をむかえる。この時期の文様にも高麗的な特色が強く現われる。特に陶磁文様には雲鶴文と野菊文などがよく見られ、そのほか仏教的な信心を反映する宝相華唐草文や高貴の相を意味する唐草文などが施されている。しかし、浄瓶の作風は12世紀に続いて象嵌のものが主流になっているが、その遺物は数少ないし、器形においても変化はない。

鉄絵青磁の技法は11世紀頃から取り入れられて、12世紀前半に入ると、その器形・意匠ともに更に洗練され、鉄絵も高麗末期まで続けられ様々な器形の中に表現された。鉄絵青磁は長期に渡って、さまざまな文様を生み出して来たが、器形面においては銅器の余韻が残っているものが多く、また、中国的器形と文様から完全に脱皮していないものが多い。

以上のように12世紀前半から続けて作られた優れた高麗青磁も、1231年から、高麗朝の終わる1392年にかけて、下降線をたどっていく。高麗青磁の特色である流麗な曲線美も時代が下がるにつれてゆるみを見せ、優雅端正より実用性と安易な造形へと移行してゆくようになった。これは高麗末期の混沌とした政情と経済が、そのような表現と感覚を生み出したのであろう。これは単に高麗陶磁だけにみられるのではなく、宋においても、輝かしい漢民族の陶磁伝統が、蒙古族に踏みにじられて、一時沈滞するのと時を同じくした。

13世紀中頃から14世紀末までの時期、即ち高麗陶磁の退潮期であるこの時期の文様表現は間断で粗く、その主題も単純簡略化傾向になり、主に使われた文様は雲鶴文と蒲柳水禽文などである。そして、浄瓶には主に鉄絵技法による唐草文と蒲柳水禽文などが施されているが、その作風も崩れる傾向が見られて高麗末期の特徴が強く現われる。これらの形は平凡な形であるが、大胆で活力があふれる。これは一般の家庭で実際に使われたものであると見なすことができる。

#### 4. 高麗浄瓶の様式変遷とその特徴

高麗時代は仏教が繁栄して仏教関係の金属仏具と生活用具が多量に作り出されて、それらは驚くほど優美で精緻なものであった。その中でも浄瓶は銀・銅・鉄・青磁・白磁・土器などで作られ、その数も多く、高麗の全期間を通じて広く流行したものである。これら浄瓶の姿勢は外観上の姿によるもので注口があるものと注口の代りに穴をあけた形状のものなどに大きく二つの形式に分類することができる。この二つの形式は印度の仏典である『律蔵』に書かれてある浄瓶と触瓶の姿と一致する。従って、私は現存遺物約150点の浄瓶をとりあげ<sup>9)</sup>、大きくI、II形式に分類して各形式の様式変遷とその特徴を分析すると共に中国や日本の浄瓶とも比較検討しようと思うのである。

## (A) I形式の特徴

〈I形式〉は現存している遺物が少なく、〈II形式〉より造形的、技術的な面で劣っている。また、この胴部の形式は韓国のほかの器形にはその姿はほとんど見られない。しかし、中国では唐から宋にかけて作られた酒注形中、宋の独子の器形である広口長頸形酒注（作品例<sup>10</sup>）の胴部と形姿が似ている。特に(A)パターンの酒注形は丸みがある胴部に広く短かい高台と長い頸部がラッパ状になったもので、これは唐末から五代にかけて作られた越州窯の典型的な形式だと言えるが、それが、だんだん定窯と耀州窯にも現われるようになる。また、韓国では三国時代と統一新羅時代の土器および金属瓶（作品例<sup>11</sup>）などからその形姿とやや似ているものを上げられるが高麗青磁の中にはこの形式が全く見当たらない。

〈I形式〉の特徴は丸みがある胴部に長くて細い頸部とラッパ状の口の上に細長い尖台を伴う形である。この形式は浄瓶の肩部に煙管の先のような注入口はなく、その部分に穴があけてあり、肩や頸のつけ根の部分が段状になっていて太い線をめぐらせてあるのが特徴である。この線は胴部と頸部を接合する部分に精巧な装飾を施しながら、もっと肩部の穴の形象を顕象化しているのであり、広がった頸部の口部分の造形と似合う。更に水の流れを止めるための機能を併せもっている。

また、これら穴の形象は陶-⑤のように如意頭形とかある物象を象って作った珍しいものがある。なぜこのような穴をあけたのかわからない。しかし、この形態の肩部に注口をつける場合、均衡の上に全体の整った姿にならないと思う。青銅浄瓶（作品①～④）は全体の整った姿に均衡を保つ優秀な作品であり、特に金-①、②の場合、大きさから推測できるのはこれら浄瓶が水滴として作られた可能性もある。これを裏付ける作例は青磁童子形水滴が挙げられる。

そして〈I形式〉の陶磁浄瓶の大部分は青銅浄瓶を象って作ったものであり、特に陶-①は金属の堅く冷たい姿がそのまま現われる。陶-②③④は柔らかくて豊満な陶磁器の感触を現わすが金属器風が少し残っている。特に陶-③④⑤は頸部が短かく太くて洗練されていないし、器形においても高麗的には見られない珍しいものだと言えよう。また、〈I形式〉には陶-④⑧⑨⑩のように陶器浄瓶が数多く見られ、これら浄瓶が高麗時代の日常生活に使われたものであることが裏付けられる。

つまり、高麗には印度と同じく〈I形式〉の浄瓶が触瓶として使われたことは肩部の穴に蓋がついていないこと、また浄瓶の造形性、表面意匠、技法などの水準が〈II形式〉より劣ることから推測できる。従って、高麗では〈I形式〉より〈II形式〉を材料の区別がなく浄瓶と甘露瓶の用途をもつ仏具として併用したことを知ることができる。

しかし、インドでは金属で出来たこの形式が厠澡罐として日常生活に使われており、中国と日本では触瓶として〈I形式〉のものがなく、金属および陶磁の〈I〉〈II〉形式が浄水瓶お

よび甘露瓶の二つの用途として使用された。中国の〈I形式〉の浄瓶としては黒釉浄瓶（作品例）<sup>12)</sup>が挙げられる。

#### (B) II形式の特徴

〈II形式〉は高麗浄瓶の主流として現存している遺物も数多く発見されていて各部分の比例もよく調和がとれている。この器形の原形は金属器であるが、統一新羅時代（10世紀頃）から陶製と金属器の器形が出現したし、高麗初期には、原形と技巧にすこぶる洗練された金属製浄瓶が作られている。これら金属浄瓶の意匠はほとんど銀入絲技法の蒲柳水禽文としてその手法は精彩で緻密に施されてある。また高麗初期の陶磁製浄瓶は中国北宋時代の陶磁文様と金属浄瓶を模倣しようとする面が強く、表面文様の意匠もほとんど同じく施されている。

高麗中期に入ると高麗初期から造形と技巧がすこぶる洗練されていた金属浄瓶様式を、材料を変えて陶磁浄瓶として試行しようとする面が強く現われている。特にこれら陶磁製浄瓶は金属器風の堅い感じより土の柔らかさと比較のおおらかな量感を感じさせる形象が主になっている。このような表面意匠とともに陶磁製と金属製に作られた〈II形式〉の浄瓶は浄水を入れる瓶と宗教的意識用の甘露瓶の用途をもち高麗全期間にかけて流行した器形である。

これら浄瓶の特徴は、筒状の形になっている胴部と比較的細い頸部、その上にのせる細長い注口（および尖台）がある。また、肩部には、注入口があり、そこに蓋がついていて浄水瓶としての機能性と清浄性を充分考慮した結果だと思う。この形姿は高麗酒注形の筒形に見られる形である。これら胴部と頸部の形状は高麗筒形酒注形（作品例）(C)パターン<sup>13)</sup>のように高麗青磁が最盛期に達する以前の11世紀後半から12世紀前半にかけて作られ、13～14世紀に至るまでの長い間、高麗青磁の基本的な形式となっていた。また中国においても10世紀中頃から11世紀後半にかけて筒形酒注形が数多く作られている。つまりこれら筒形酒注形は両国とも金属器にその原形があるが、その時代の人びとの高い作陶技術と優れた芸術的造形感覚によって陶磁独特の筒形酒注へと変化させたものが幅広く作られている。また、高麗では筒形酒注の胴部の形姿を基本としたさまざまな器形が作られており、浄瓶もそのような基底の上に新しい形象を誕生させたものである。

中国にも〈II形式〉の浄瓶が主流になっており、現存遺物としては青銅浄瓶と北宋前期の定窯で作られた白磁浄瓶がほとんどである。これら白磁浄瓶の注口は龍を象ったものが多く表面意匠は蓮弁文および唐草文などが陰刻、陽刻され唐時代の白磁浄瓶とは異なる様式を表わしている。このような背景の中で作られた〈II形式〉高麗浄瓶は大別して二つの流れによって発展して行く。これらを(A)・(B)パターンに分けてその特徴を考えて見たい。

(A)パターンは胴体の肩部が丸みがあり豊満で、肩からなだらかに湾曲する胴部、わずかに曲線を描きながら上方へ延びる頸部、胴の裾部分が細くなって絞った形に高台部分はすこし外反

している。これら浄瓶の形象は高麗浄瓶の典型的な形式として各部分の比率もよく調和がとれている。

金〈II-A-1〉は扶餘扶蘇山、出土品として、越州窯系の青磁と金属製遺物などが同時に出土され、その編年はおおよそ10世紀頃のものだと推測できる。これは浄瓶の典型的な形式であり、唐時代の浄瓶にもこれと同じものが見られる。また、同姿の浄瓶が唐・禪宗7代・神会の墓（684-758）から出土されたもので日本の正倉院と法隆寺の遺物の中に見受けられる。

〈A-2〉は下胴部の高台部分と頸部、頸部と胴部のつなぎ目の部分に二つの線刻帯があり、肩部分にある注口が六角の面取りになった珍しいものである。〈A-9, 10, 11〉の表面意匠の技法は銀象嵌が主流で胴部には全面に蒲柳水禽文が描いてある。そして要所に唐草文、雲文、蓮華文などを銀象嵌および陰刻で施している。これらの浄瓶は主に統一新羅時代から中国の影響を受けて造り始め、高麗初期にはすでに高麗風に洗練された器形になる。

〈陶-II-A〉の作品例を見ると高麗初期から造形と技巧はすこぶる洗練を極めていた金属浄瓶様式を材料を変えて陶磁浄瓶で試作しようとする動きが出てくる。(A-1)は広州上山谷里山土の白磁浄瓶として11世紀末頃のものだと推測する。この時期は越州窯系より北宋の耀州窯、磁州窯、定窯系の影響を受けながら高麗の独創的な高麗陶磁創造の基を築き始める時代である。この浄瓶の器形にも未だ北宋風がのこっている。(A-2)は浄瓶の中、珍しいものであるが、11世紀初の高麗青磁長頸瓶と胴体の形姿と表面意匠が似ている。(A-3~11)は金属器浄瓶を陶磁器に写そうとする面が強く現われており、特に(A-7, 11)は形態と曲線などが非常に青銅浄瓶と類似し、表面文様の内容もほとんど同じくほどこされている(A-1, 2, 10, 11)の器形の特徴は高台がなく平底で、胴部の豊満さがそのまま下部にまで至って下胴部の挙がすこし外反している。(A-8)は器底の仕上げは扁平で古格を備えていて、三和里出土品の浄瓶と同じであるが釉胎や器形ははるかに洗練されている。(A-12)の瓜形胴部は高麗に流行した器形として高麗の人びとに好まれた形象である。これらは瓜の形を象って作った酒注が数多く、酒注形の胴部には、6稜、8稜、12稜、16稜などの稜を入れ写實的に瓜形を表現する。(A-13)は注口部と上端の口を龍首とし、頸部に設けられた鏝の上方と頸の付根とにそれぞれ龍首を飾った他に類例のない浄瓶である。これらは翡色青磁釉と端正な器形、鋭い龍首の表現は高麗最盛期の作品であると考えられる。(A-14, 15, 16)の形態はきわめて洗練されており、表面意匠は象嵌文様化して陰刻文浄瓶と比べると端正な感じの浄瓶である。

(B)パターンはほぼ筒状になっている胴体と傾斜した肩部はやや張り出して、上胴部から下部にまで曲線を描いている。(金-B)の中、年代が明らかに解る作例は見られないが、概ね、高麗初期以後、つまり12~13世紀間のものだと考えられる。

(B-1, 5, 6)は頸部と胴部をつなぎ目の部分に線刻帯がある。特に、(B-5)は線

刻帯がはっきり現われており、頸部にのせる細長い注口と線刻帯結はがっちりしている。この線刻帯は〈I形式〉の技能性とは違って金属製品の製作工程のため生ずるもので大部分の青銅浄瓶の胴部にはこのような継ぎ目が見られるのである。(B-2)は浄瓶と承盤がセットになっている珍しいもので、高さから推察すると浄瓶が水滴として使われたものだと思われる。

(B-8)は(B-9)と同じ形姿であるが、ただ、頸部上の細長い注口と肩部に注口がついているのが違う。文様も蒲柳水禽文の同文様である。

(陶-B)の作品例は金属器風の堅い感じより、土の柔らかさと比較的大きい量感を感じさせるおおらかな作であるといえる。つまり、青銅器を倣った鋭さが失われ、非常に陶磁器らしいやわらかさを見せている。表面意匠は白磁・青磁陰刻・鉄絵青磁などが主になっている。

(B-1)は三陟・北坪邑、三和里古墳出土の遺物として、その年代は10世紀中頃のものとして推測される。浄瓶の特徴は、器底の仕上げが扁平で古格を備えており、胴体肩部についての注入口は軽快な形に仕上げられている。(B-8)までは(B-1)と同姿である。特に(B-5, 6, 7, 8)は珍しく黒釉浄瓶として肩部の傾斜がひどいものである。(B-9)は浄瓶の頂部が短かくて厚いし、その面取りは鈍角であり、注口部の蓋も洗練されていない。つまり、これらは新羅以後の古式浄瓶様式を現わす(B-10)と頸部と尖台をつける部分の形が同一である。(B-12)から(B-21)までは12世紀前半期の典型的な様式として頂部が長く細く、鋭角で面取られており、また、頭部の陽刻横帯、注口、高台の形態などから金属器の特徴が強く現われる。特に(B-14)と(B-15)は蒲柳水禽文が陰刻されているが、その文様はきわめて簡素で、線味を帯びた半透明性の釉がむらなくつややかにかかっている。また、(B-18)は陽刻された胴一面に蓮唐草文が、肩には磁州窯系の作品に見られる唐草文が片切彫で蓮肉に表され、細部にまで丁寧に毛彫が添えられている。(B-22)からは銅器を模した旧来の形から抜け出した平凡な形として、一般の家庭で実際使ったものと見なすことができよう。これら形の特徴は豊満な上胴部から下胴部に向って細くなり、そこから高台の部分までは少し広がる形状で高台がなく扁平底である。このような胴部の形式は高麗青磁の瓶とか酒注形(作品例)によく見られる形である。しかし、(B-26)は銅器の姿が残っている。(B-22)からは高麗から李朝に転換する過程を見せてくれるにはよい作例であり、少し器形が崩れる傾向が見られる。表面意匠は鉄絵による蒲柳水禽文が簡潔に描いてある。これは大形の鉄絵青磁が盛んに作られるようになり、作風が変化する13世紀ごろからだと考えられる。しかし、宋ではこのような作風は見られない。

#### まとめ

以上、高麗時代に作られた浄瓶形を取り上げ、それぞれの器形を大まかに分類し、それら器

形がどのように展開・発展したかについて調べてきた。その結果、次のようなことが判明した。高麗浄瓶の原形は中国にあるが、高麗の人びとにたいへん好まれ、数も多く、非常に精緻な手法の丁寧な作調のものが作られている。また銅器を模した形を陶工たちが高麗化させて、その形をより高麗風な素朴で、力強く、さらに柔軟なものへと変化させていった。文様においても青銅銀入絲浄瓶と香炉によく現われる蒲柳水禽文を中心に高麗人の好んだ詩情の一面を風景構成として表現したものが多い。

このように高麗時代の浄瓶は多種の材料と多様な表面意匠が使用されて、その生産数量も非常に多かった。これは、当時の仏教を国教としていた社会的背景が一因となっている仏具や僧侶の生活必需品として併用されるにとどまらず、一般の家庭にも広がってゆき、浄瓶の使用が庶民の楽しみの一つとして昇華していったのである。また、高麗では浄瓶が中国、日本の甘露瓶の用途とは異なってインドと同じく浄水瓶、触瓶、甘露瓶などに使用された。しかし、高麗も触瓶より浄水瓶と甘露瓶として楽しんで使れたことが現存遺物を通じて知ることができる。また、浄瓶はほかの器形に比べ金属器と陶磁器の作品が長い間、同じパターンで作られたのも特徴である。今後、引き続き、他の瓶形との比較を加え、浄瓶形の変遷と用途について更に研究の密度を高めていきたいと考えている。

## 註

- 1) 『大蔵経』22, 23, 24巻参照
- 2) 唐の高僧・義浄が著したインドやスリランカをはじめとする当時の南海地方の見聞記。p. 24～26参照
- 3) 和泉市久保惣記念美術館特別展示図録。1986『注器』p. 24
- 4) 『大蔵経』22巻 905 b
- 5) 註3と同一
- 6) Kuṇḍikā (梵語) / 僧、尼の持っている水瓶。南海奇帰内法典によると唐代の中国語では、スイピャンと発音していた。
- 7) 作品例1：本論文 p. 15。
- 8) 作品例1：No.22, 23 本論文 p. 15。
- 9) 本論文 p. 14, 15参照
- 10) 『宋及び高麗における酒注形の様式変遷』(1986/権相仁 京都市立芸術大学大学院修士論文 p. 79～86)
- 11) 作品例2：本論文 p. 15。
- 12) 中国浄瓶 No.14：本論文 p. 14
- 13) 註10と同一。p. 54～78参照

淨瓶一覽表 I — 韩国淨瓶 (青銅, 陶製)

Table with 6 columns: 作品区分 (Work Division), 名称 (Name), 文様 (Pattern), 年代 (Period), 所蔵及出土 (Collection/Excavation), 高さ (Height). It lists various Korean Pure Vessels (淨瓶) categorized by form (I, II) and material (bronze/ceramic).

淨瓶一覽表 II — 中国淨瓶 (青銅, 陶製)

Table with 6 columns: 作品区分 (Work Division), 名称 (Name), 年代 (Period), 所蔵及出土 (Collection/Excavation), 高さ (Height). It lists various Chinese Pure Vessels (淨瓶) categorized by material (bronze/ceramic).

作品例 1

Table with 6 columns: 作品区分 (Work Division), 名称 (Name), 年代 (Period), 所蔵及出土 (Collection/Excavation), 高さ (Height). It provides detailed examples of Pure Vessels, including their specific names, dates, and where they are housed or found.

作品例 2

Table with 6 columns: 作品区分 (Work Division), 名称 (Name), 年代 (Period), 所蔵及出土 (Collection/Excavation), 高さ (Height). It provides detailed examples of Pure Vessels, including their specific names, dates, and where they are housed or found.

作品例 3

Table with 6 columns: 作品区分 (Work Division), 名称 (Name), 年代 (Period), 所蔵及出土 (Collection/Excavation), 高さ (Height). It provides detailed examples of Pure Vessels, including their specific names, dates, and where they are housed or found.